

ていたことで、朝倉撰の写実力の高さがより顕著に見えた。

作品を全て見終わって出口に向かう途中に、朝倉撰自身の写真が飾られていた。こんなに明るくて綺麗な女性が描いていたのだなとこれまでの作品と彼女の生涯がリンクしたようで印象に残った。よくアーティストは孤独な人が多いと言われているが、彼女は人と関わることや人そのものにとっても関心があったという印象を受けた。また、どの作品からも大きなエネルギーを感じた。その中には、彼女の創作に対するエネルギーと作品に描かれた人々が持つエネルギーの両方があるのではないかと考えた。そして、戦後の苦しい状況の中で絵を描き続けるとはどういうことなのかということを考えさせられた。これは、朝倉撰自身も悩み苦しんだ問いではないかと感じた。そして、彼女は、絵を描くことを通して厳しい現実にも希望を見出そうとしていたのではないかと考えた。同時に、彼女の作品を鑑賞して、苦しい状況の中でも描きたいという正直な気持ちに向き合い、自分の「好き」ととことん貫いていたのではないかと感じた。彼女の好奇心や信念のおかげで、多くの作品から挑戦やエネルギーといったイメージを感じることができたのではないかと考える。



ゼミ生の集合写真

## 秋葉原見学レポート

国際日本学部 日本文化学科 3年 松本 悠里圭

10時半に秋葉原駅に集合し、秋葉原駅周辺のオタクカルチャーが詰まった部分を散策しました。散策時、広告の種類が渋谷や東京駅などかなり違うことが印象に残りました。振り返ってみると、広告含めガチャポンやBGMなど、中心に据えられているキャラクターや歌手は、女性のものが多かったように思います。電気街と呼ばれている地域でも、電子機器以外に売られていたタペストリーやポスターは女の子キャラクターのものが多く、かけられていた音楽も女性が歌手を務めているものだったように記憶しています。対して、JR秋葉原駅の近くにあるラジオ会館4階の「anime」では、少年漫画などのグッズも多く取り扱われていました。印象に残っていたのは、電気街のようなキャラクターグッズの取り扱いにおいて女性キャラクターが多いテナントでも、「anime」のような複合的な店舗でも、人気アニメ『鬼滅の刃』のグッズが取り扱われていたことです。水着の女の子たちのガチャガチャに混ざった竈門炭治郎ら鬼殺隊の面々は鬼ではなく、何か違うものと戦っているような、長男だから立ち続けられているような、ある種の異様さを感じました。アニメ効果というのは私たちが思っている以上にキャラクターの活躍の場を広げているのかも知れません。

休憩を兼ねて「入国」しためいどりーみんというメイド喫茶は、単身利用のお客さんが男性しかいなかったことが印象に残っています。また、ゼミ生の一人が「単身では来店しづらい」といった趣旨のことを言っていたことから、メイドというカテゴリーがオタ

クの象徴のようであり、未だ門戸が広くひらかれたカテゴリーに至っていないのだと感じました。また、来店時のルールとして、離席の際にメイドへの声かけが求められていたのも、コンセプトカフェの特徴を感じました。「にゃんにゃん」の声かけの元、メイドさんと呼んでお手洗いに立つというシステムのものでした。やはりメイドというキャラクターを消費する商売だからこそトラブルが起りやすいのか、トラブル防止に繋がる工夫なのだろうと思いました。同じテーブルのゼミ生らがアイスフロートを注文している中、ひとりオムライスを注文した私ですが、卵が薄焼きだったことを除けば大変満足なオムライスでした。卵は半熟が好きです。キッチンには日曜日の昼ごろと繁忙が予想できるタイミングにも関わらず2名体制。対してフロアのメイドさんは4名は常におり、飲食店と考えると大変心もとないスタッフ体制と感じました。しかし、ここはご主人様の帰国を待ち侘びたメイドたちの国、飲食を扱うとはいえ飲食店とも言い難く、コンセプトカフェと言われることもあるものの、カフェとも異なるものを感じました。メイド喫茶という空間は食べ物でも、休憩どころでもなく、メイドを求めて足を運び、メイドを消費する空間なのだと思います。

最後に足を運んだ明治大学内、米沢嘉博記念図書館



めいどりーみん LIVE RESTAURANT Heven's Gate 店の店員さんと一緒に記念撮影

のギャラリーの蔵書も大変面白かったのですが、一番印象に残ったのは、一階に展示されていた2004年にベニスで開催されたOTAKU: persona = space = cityをテーマにした世界的会合で披露されたコミケのサークルカットを配置した模型です。サークルカット、いわゆるサクカに描かれている作品の数々に年代を感じることは勿論なのですが、『テニスの王子様』の手広さに驚きました。隣接する『BLEACH』や『ONE PIECE』も参加サークル数は多いのですが、圧倒的な『テニスの王子様』。あそこも、これも、王子様。この王子様たちは一体どこまで行くのかと思った程度でした。他にも、お誕生日席と呼ばれることの多い部分にサークルが並び立っていた点が意外でした。赤ブーが開催する即売会では1または2サークル程度の部分に4も5もサークルが並ぶほどで、夏場にこのぎゅうぎゅう度合い、制汗剤等のCMにびったりなのではないかと思いました。

以上が私のアキバ見学の感想です。稚拙な文ではありますが、少しでも私が見たアキバの一味違う空気感、オタクカルチャーの有り様を感じて頂ければと思います。

## 島川ゼミナール活動報告

### 「観光の現地現場にこだわる」

国際日本学部 国際文化交流学科 観光文化コース

3年 渡邊 真子

私たち島川ゼミナールは、半期の間様々なことに取り組み、学際的な学びを深めてきた。本稿では、他にはないゼミナール活動の全容を紹介していきたいと思う。

#### 【JR東日本×南伊豆町役場×島川ゼミナール 産学連携プロジェクト「南伊豆観光振興を考える」】

突然だが、南伊豆町に訪れたことがある読者はどのくらいいるのだろうか。静岡県東部伊豆半島の最南端に位置する南伊豆町。横浜から電車で行くとすると、熱海や伊東を通り過ぎ伊豆急下田駅に着いたら、そこからはバスや車で移動するというのが基本的なルートとなっている。この一連の移動に合計で三時間ほどかかり、横浜から南伊豆町との間に熱海や伊東などといった有名観光地があるため、南伊豆に至る手前が最終目的地となっている人も多いのではないだろうか。実際、JR東日本が私たちとブレゼミナール生を対象に取ったアンケートでは、「南伊豆町に行ったことがない」「よく知らない」という人が少なくなかった。そうした現状を抱えている南伊豆町を観光の視点からどのように振興させるかということが本プロジェクトの目的であり、JR東日本の販売促進課で観光開発をしている方々と、半期の間考察を重ねてきた。また、岡部克仁南伊豆町長をはじめとする町役場の方々も全面的に協力してくださっているため、私たちは自由な発想でプロジェクト提案を考えることができていた。

私たちが観光振興を考えるにあたり、元藤沢市長の海老根靖典さんが「地方自治体の経営



JR東日本さんによるレクチャー（この方も14年前の島川ゼミ卒業者）

と地域活性化において大切なこと」をテーマに特別講義をしてくださった。その中でも印象的だった言葉がある。それは、「答えは現地現場に落ちている」という言葉だ。インターネットの普及により、大抵のことは調べれば何でも分かる時代になった。それはそれでありがたいことだが、やはり現地現場に赴いて自身の肌で感じることでしか知り得ないこともあるだろう。頭の中で考えたイメージだけでは現実性に欠け、机上の空論になってしまう恐れがあるということも危惧しているのだ。当たり前のことかもしれないが、基本に立ち返った時にとっても大切なことなのではないかと感じた。私たちは、プロジェクトの一環として夏休みに南伊豆町を訪れる。その際、現地現場に行ったからこそ分かったことを大切にしながら、その地域の観光振興を考えていきたいと思っている。

そして、そういったお話や島川教授のアドバイスを踏まえ、私たちは四つのチームに分かれ、「ソロキャンプ」「Googleストリートビュー」「鉄道とバスのスムーズな接続」「民宿の魅力発信戦略」の方向性からプロジェクトの提案を考えている。現地訪問を終えてから行う具体的な提案の報告をぜひ楽しみにしてほしい。

#### 【「旅行業、公務員、観光エンタテインメント それぞれの道へ」】

私たち島川ゼミナールでは、大学卒業後の進路を見据えて「旅行業志望組」「公務員志望組」「観光エンタテインメント志望組」の三つの部門に分かれ、授業時間内外に徹底対策を行っている。

まず「旅行業志望組」は、総合旅行業務取扱管理者の資格取得に向け、JTB総合研究所の課外授業と、